慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	The Mozart Companion : Edited by H. C. Robbins Landon and Donald Mitchell : Faber paper covered Editions 1964
Sub Title	
Author	大野, 洋(Ono, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.24, (1967. 12) ,p.168(125)- 177(116)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00240001-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

The Mozart Companion

Edited by H. C. Robbins Landon
and Donald Mitchell
Faber paper covered Editions 1964

大　野　　洋

Wolfgang Amadeus Mozart ＜以下 Mozart と記す＞に関する文献はこれまでも数多く出版されているが，おそらくこの書で試みられているように Mozart の多岐にわたるぼう大な作品群を楽種別に扱った研究書は始めてである様に思われる。しかもそれぞれのジャンルに精通した11人の Mozart 研究家の共同研究である点が注目される。

Otto Erich Deutsch・Mozart Portraits; Friedrich Blume・Mozart's Style and Influence ; Arthur Hutching・The Keyboad Music ; Donald mitchell・The Serenades for Wind Band; Hans Keller・The Chamber Music; Hans Engel・The Smaller Orchestral Works ; Jens Peter Larsen・The Symphonies; Friedrich Blume・The Concertos＜ 1 ＞ Thier Sources ; H. C. Robbins Landon・The Concertos ＜ 2 ＞ Their Musical Origin and Development; Gerald Abraham・The Operas; Paul Hamburger・The Concert Arias; Karl Geiringer・The Church Music ;

ここで私は特に問題点の多い交響曲の項を選んで紹介してみたい。従来 Saint-Foix[(1)] とEinstein[(2)] のものを除いては，"M. G. G"[(3)] の Mozart の項の文献目録にもみられるように，Mozart の交響曲を体系的に扱った文献

がない，しかも Larsen は現代の Haydn 研究の創始者であり，その研究にうらづけられた Mozart の交響曲の研究は従来のものにない示唆を含んでいるということ，古典派交響曲の成立を考察していくうえでも，Mozart の交響曲の発展をあとずけることは重要な手懸を得られるであろう，そのような理由から，この項を選んだのである。

Larsen の著作にしたがって本文を紹介する。Mozart は彼の短い生涯の中で<1766～1791>，50曲をこえる交響曲を作曲している。しかも Mozart の交響曲作品はたえまなくうみだされており，Mozart の変遷を反映していることは注目されなければならない。

Mozart が最初の交響曲<K. 16>を作曲したのは1764～1765年である。(Einstein は1765年とし，Saint-Foix は1764年12月，あるいは1765年1月と推定している。) また Mozart が最後の交響曲，すなわち〝ジュピター〟交響曲を作曲したのは1788年である。したがって8才から，32才にわたって Mozart は交響曲を創作しつづけたのである。

これを Haydn の交響曲創作と比較してみると，その作曲年代がほぼ同一であることは興味ぶかい。Haydn は1757年頃(25才) から1795年(63才) にかけて106曲以上の交響曲を生みだしているのである。(4)

<K>は Köchel 番号を示す ( ) の中は Köchel第3版による。

註 (1) Saint-Foix, Georges du Parc Poullain.
この紹介に引用したのは—The Symphony of Mozart—(Les Symphonies de Mozart <Mellottée, Paris 1932—translated from the French by Leslie Orrey>—Second Impression 1948. Dobson.

註 (2) Alfred Einstein 1880～1952 Köchel の根本的な改訂の仕事で知られる<Köchel 第3版>この紹介に引用した文献は—Mozart his character, his work. Oxford University Press. 浅井真男訳 白水社
(この書評では浅井氏の訳文をつかわせていただいた)

註 (3) Die Musik in Geschichite und Gegenwart

註 (4) Landon によれば，<H. C. Robbins Landon—Haydn Symphonies—BBC publications 1966>彼はHaydn が第1番の交響曲を作曲したのは1757年，あるいは1758年としている。

Mozart の最初の交響曲は<K. 16>ロンドンにおいて作曲された。当時ロンドンにおいては Bach-Abel 予約演奏会が行われており，Mozart の最初の交響曲は明らかに，J. C. Bach と Abel の影響をうけたものであった。特に J. C. Bach の影響が顕著である。この事実は<K. 18>の作品に見出せる。同時に，父 Leopold Mozart の存在も忘れるわけにはゆかないであろう。L. Mozart は作曲家としても腕を持った人であった息子の作曲を手助したことは想像される。しかし，このことは，大した問題ではない。その愛らしい作品は，疑いもなく子供らしい感覚に満ちあふれているからである。

Mozart は1765年の末，ハーグで<K. 22>変ロ長調の交響曲を作曲したのち1766年から1767年にかけてザルツブルクに滞在することになる。Wyzewa[5] と Saint-Foix はヘ長調の交響曲<K. 76 (42a)>[6]を，この時期にあてはめようと試みているが，Einstein はその作品は早くとも Mozart がウィーンを離れる前の1767年の秋に作曲されたとしている。Larsen はこの両見解に批判を加えて<その交響曲のフィナーレの主要主題は，有名な Rameau のガヴォットから借用しているということは疑い。事実，ウィーンの伝統の影響を連想させる。アンダンテはメヌエットの性格をもっているとはいえ，伝統的な色彩がつよい。しかしながらアンダンテに続く本来のトリオつきエットは，メヌエットの性格が強く現われている。この理由からするメヌエットは多分他の楽章よりも後に作曲された Einstein の説は妥当であろう。Saint-Foix はこの作品を重要なものとみているが私は賛成できない>(この見解からも明らかなように，Larsen は，単に交響曲の成立年代を設定するだけでなく，作品自体の様式的考察から，従来の諸見解に鋭い批判をくわえている。) Mozart はウィーン滞在中に，すく

註（5）Wyzewa 1862—1917 ポーランド生れ，幼い頃よりフランスに移り，フランスに於ける Wagner 音楽の普及に努力，又モーツアルト研究家としても著名

註（6）Wyzewa と Saint-Foix の共著— W. A. Mozart, so vie et son oeuvre de I' enfance á la pleine maturité—

なくとも3曲の交響曲を作曲している。<K. 43, K. 45, K. 48>である。そして，多分2曲の交響曲がさらに加わる。1曲はト長調<K. 45a>[7]であり，他の1曲は，まだ公刊されていない<K. 45 b>[8]変ロ長調交響曲である。これらの文響曲のうちにウィーンの交響曲様式を明確にたどることができる。Haydn, Mozart 以前のウィーンの交響曲作曲家としては Wagenseil, Holzbauer, Hoffmann, Gassmann などがあげられる。

Mozart は1769年末から3回にわたってイタリア旅行をおこなう。第1回目のイタリア旅行へ出かける前，ウィーンから帰ってきた Mozart は1年間ザルッブルクに滞在した。このザルッブルク時代の交響曲については確かではない。しかし第1回のイタリア旅行の時からは交響曲作曲家としての彼の発展を考えることができる。

イタリア時代の作品は次のようなものである。<K. 81(73 ℓ), K95(73n) K. 84(73q), K74>

最初のイタリア旅行の後で Mozart 父子は第2回目のイタリア旅行以前の約5ヶ月間<1771年3月下旬～8月中旬>をザルッブルクに滞在した。この間に次の交響曲が作曲された。<K. 75, K. 73 (75a), K. 110 (75b)>

これらの諸交響曲の特徴は前に書かれた第1回のイタリア旅行の時の作品に比べれば，進歩的な傾向は少しもなく，再びウィーンの伝統に支配されている。室内楽的な効果が追求されていることも特徴といえる。特に Haydn の3つの四重奏曲集，作品9，17，20，から多くの影響を受けているようにおもわれる。

第2回目のイタリア旅行から帰って後，Mozart の生活はその旅行の前後よりもなお一層大きく交響曲の創作にかかわりあいをもつようになった。1772年8月すなわち第3回目のイタリアへの旅の始めとの間に，彼は

註（7）この作品は1923年の Mozart-Jahrbuch に於て Wilhelm Fischer によって Lambach の修道院から発見されたパート譜から初めて公刊されたもの

註（8）Köchel 第7版によればすでに Partitur は B & H 社から出版されている。

8曲の交響曲を作曲した。

＜K. 114 K. 124 K.128 K.129 K. 130K. 132 K. 133 K. 134＞

これらの諸交響曲の特徴は，最初のイタリア旅行の時の交響曲の調性が5曲のうち4曲が普通のニ長調であるのに反して，この8曲の交響曲の調性は従来一般に用いられていない拡い範囲にわたっている。

＜K. 133＞はニ長調＜K. 128＞はハ長調＜K. 130＞はヘ長調＜K. 124＞と＜K. 129＞はト長調＜K. 114＞と＜K. 134＞はイ長調＜K. 132＞は変ホ長調である。またこれらの作品のうちの2曲は3つの楽章を持ち，他の6曲の作品はメヌエットを持つ4つの楽章から構成されている。この諸作品を通じて，我々は Mozart がイタリア様式とウィーン様式との間をさまよっていたあとで，Mozart の交響曲は明らかにウィーンの伝統の方向へむかったということを知るのである。これに続く4つの交響曲，すなわち＜K. 162 K. 181（162b）K. 182（116c）[9] K. 184＞[10]は1773年春の日付があるが，これは第3回目のイタリア旅行の影響が顕著である。そしてこの4曲はすべてメヌエットのない伝統的な3楽章構成である。

1773年夏のウィーン滞在が Mozart に新しいインスピレーションをあたえた。

この時までに Mozart がシュトルム・ウント・ドラング期＜1770～1772＞の Haydn の交響曲を知っていたことは確かなことである。この時期の Haydn の交響曲は力強い表情にみちた一連の作品であり，新しい形式への道を開いたものだが，1773年11月から翌年の5月にかけての Mozart の＜K. 183＞[11]＜K. 201(186a)＞作品のうちには，その影響がみられる。人々はこれらの作品のうちに Haydn の交響曲の〝感情表出〟ということを疑うことはできない。(Larsen はここでただ曖昧に1770年～1772年の Haydn の一連の交響曲作品としか書いてないが，Saint-Foix の著作によれ

註（9）Köchel 第7版によれば 173 dA

註（10）Köchel 第7版によれば 161a

註（11）Köchel 第7版によれば 173 dB

ば，はっきりと La Passione, Farewell, Trauersymphonie, としてかかげている。また当時のウィーンの音楽界が若くて感受性の豊かであったMozart にとっていかに重要であったかということは Burney[(12)] の著作にも明らかである。彼はウィーンを音楽界の主都と呼び，当時活躍した作曲家10名をあげている。Hasse Gluck, Gassmann, Wagenseil, Salieri, Hoffmann, Haydn, Ditters, Huber,)

これらの作品に続いて ＜K. 199 (162a)[(13)] K. 200 ＜173e＞ K. 202 (186b)＞の3曲が書かれた。＜K. 199＞の交響曲は1773年春に作曲された。ある著作者達は，この交響曲と前述の2曲の交響曲を関係づけようとしているが，しかし，その作品に1774年4月の日付が銘記きれていることを除けば，その説に同意することはできない。

なぜなら，確かに＜K. 199＞の交響曲は他の交響曲と同じ三楽章で構成されてはいるが，その第一楽章は形式と内容において Haydn の1770年～1772年のシュトルム・ウント・ドランク期の作品よりむしろ1760年代の作品に類似しているからである。

＜K. 183＞のト短調の小交響曲は，およそ1780年以前に作曲されたすべての交響曲と同じように従来あまり注目されていなかった。しかしその作品は最近になって注目されはじめた。この作品の調性から＜K. 550＞ト短調大交響曲との関係をさぐったり，この作品の中に Mozart の自己告白を聞こうとするのはあまり意味のないことである。それよりはこの時代に作曲された一連の Haydn の次の短調の交響曲に刺戟されたとみるべきであろう。＜26番ニ短調・34番ニ短調・39番ト短調・44番ホ短調・45番嬰ヘ短調・49番ヘ短調52・ハ短調＞

イ長調交響曲＜K. 201(186a)＞は Mozart の初期の交響曲の頂点をかざるにふさわしい作品である。しかしこの作品は根本的にト短調の交響曲の表現に豊んでいるものをしのぐ試みではない。この頂点に到達した後の Mozart の交響曲の発展は，これより数年前の Haydn のそれと同じ

註 (12) General History of Music,

註 (13) Köchel 第7版によれば，161b

ような道を歩むことになる。しかしそれは Haydn の場合よりも一層急激に行われたのである。

これ以後の諸交響曲は性格が変わった。それは型にはまった楽しみのための音楽としての性格が大きく強調されるようになったことである。1774年夏から1778年の春にかけては Mozart は一曲も交響曲を作曲しなかった。しかしこれに代わってこの時期には，2種類の交響的作品が書かれた。ヴァイオリン協奏曲とディヴエルティメントの多様な形式である。1775年に彼は5曲のヴァイオリン協奏曲を作曲した。又ザルツブルク滞在中はつねにディヴエルティメントやセレナーデも作曲した。これらの作品の中では〝ハフナー〟と呼ばれる＜K．250(248b)＞セレナーデが最高のものである。この8楽章から成る作品は Mozart がこれまでに作曲した最も品格のある作品である。

1777年からマンハイムとパリへの旅行をしたが，そこで Mozart は強い音楽的な印象をうけた。その印象を証明する作品が1778年の夏パリで作曲された。パリ交響曲＜K．297(300a)＞である。

この作品は当時の Mozart がザルツブルクでの音楽生活に困難を感じて，ミュンヘン・マンハイム・パリへの旅行を通じて新しい就職口を求めようとして意のままにならず，苦しい状態で書かれたものとしてはその痕跡を少しも発見することはできない。

この作品をこれまでに作曲された交響曲と比べてみると本質的に新しいことを発見する。パリで Mozart はザルツブルクの宮廷におけるアンサンブルよりもより大きいオーケストラのために作曲する可能性がでてきたのである。

パリ交響曲にはハフナーセレナーデにおいて完全に発展した作曲法とオーケストレーションが生かされている。そしてもしこれまでの協奏曲やディヴエルティメント，それにザルツブルク時代のセレナーデを持っていなかったらこの性格と構成の交響曲の存在は全く理解しがたいことであろう。またこの作品はウィーン古典様式によって，最初に円熟した交響曲としてパリで書かれた交響曲である。

1779年1月から1781年の夏にかけて再び Mozart はザルツブルクに滞在する。この間に，交響曲ト長調＜K．318＞と交響曲，変ロ長調＜K．319＞が作曲された。長い沈黙の後に何故 Mozart がまた交響曲を作曲しはじめたのか明らかではないが，パリ交響曲の成功が Mozart がまたこの形式に心ひかれるようになったものと思われる。1780年の晩夏，Mozart はザルツブルクでの最後の交響曲を作曲した。すなわち＜K．338＞のハ長調の作品である。この作品は今までのザルツブルクの室内様式ではなく大規模な交響作品である。

ザルツブルクの大司教ヒエロニムスとわかれてからの Mozart の生活はウィーンを中心に営まれたが，この生涯の最後の10年間は交響曲が必ずしも多く作曲されたとはいえない。しかしこの期間に偉大な六曲の交響曲が生れた。それは次の作品である。〝ハフナー〟交響曲＜K．385＞ニ長調が1782年に〝リンツ〟交響曲＜K．425＞ハ長調が1783年に，プラーハ交響曲＜メヌエットなしの交響曲＞＜K．504＞ニ長調が1786年の終りにウィーンで作曲された。そしてこれに1788年の夏に書かれた3曲の交響曲，K．543，K．550，K，551が加わる。（この一連の作品は Haydn が1785年から86年にかけて書いた六曲のパリ交響曲の成功に刺戟されて作曲されたと思われる。）

〝ハフナー〟交響曲とセレナーデの中間を行く作品である，〝リンツ〟交響曲はこの6曲の最後の交響曲作品群において個性のあまりない作品であるが，素晴らしく鳴り響く作品である。

〝プラーハ〟交響曲は古典音楽のうちで最高の傑作の一つである。それは最後の偉大な3曲の交響曲とほとんど同じ高さにある。またこの作品はフィガロとドン・ジョバンこの間に作曲されたので，2曲のオペラと精神的な類似点を持っているということは誰れがみても明らかである。3曲の偉大な交響曲は様式においては，はなはだしく異っている。

1772年～1774年 Haydn と Mozart の諸交響曲は古典交響曲の発展においてその頂点に達したことは明らかである。そしてそれにつづく10年間は曲線は上下している。その曲線は1785年からうわむきになり，突然，激

しいクライマックスに到達する。それは Haydn の1785年～1786年のパリ交響曲，1786年 Mozart の〝ブラーハ〟交響曲，1788の最後の3曲の交響曲，Haydn の 1787年～1788年の "Tost" "d' Ogny" の12曲のロンドン交響曲，それに Beethoven の交響曲も含まれるのである。

以上交響曲の項を本文にそって紹介してきたのであるが，Larsen は数多くの参考文献を駆使してウィーン古典派を形成するもう一人の巨匠 Haydn との比較を中心に Wyzewa, Saint-Foix, Einstein の説もとり入れて Mozart の交響曲の発展を解いている。しかしなんといってもこの書の特徴は，Haydn との比較において Mozart の交響曲をとらえているということである。Haydn 学者である Larsen が Haydn についての学識を根底として Mozart をみているということが Einstein や Saint-Foix とは大きく異るところである。それは文章のいたるところで発見される。その一例をあげてみると前述のト短調小交響曲についての叙述の中でLarsen は〝この作品の調性から<K. 550>ト短調〝大〟交響曲との関係をさぐったり，この作品の中に Mozart の自己告白を聞こうとするのはあまり意味のないことである。それよりはこの時代に書かれた一連の Haydn の短調の交響曲に刺戟されたとみるべきであろう〟と言う。ちなみにこれを Einstein の説と比べてみると，その説は全く異っているのである。Einstein は言う。〝ト短調小交響曲は Mozart の最初の短調交響曲である一方，すでに単なる社交的なものをはるかに超えている。いや，それにさからっている。あの時代には常に短調で書かれた交響曲があるが，この交響曲は全く個人的な苦悩の体験にかかわるものである。Saint-Foix は〝ト短調小交響曲は1788年の有名な傑作を予言したものである。〟その傑作は苦しい Mozart の精神のみによって説明を見出すことが可能である。〟

このことをみてもわかるように Larsen は Einstein や Saint-Foix と

は全く説を異にしているのである。Larsen は，ト短調小交響曲を単に Haydn の刺戟としか書いていないのに反して，Einstein は個人的な苦悩の体験とし，自己告白的な要素が深いということを強調し，Saint-Foixは1788 年のト短調大交響曲の前段階としか考えないのである。このように Larsen は Mozart の自己発展というものをそのあとからたどるのではなくて，その時点，その時点において周囲の状態を観察することにより，より客観的にうかびあがらせようとする。それは他の一例を引用することでより明らかになるであろう。Einstein によれば〝Mozart が書いた最後の3曲は1788年夏のものである。変ホ長調＜K.543＞ト短調＜K.550＞ハ長調＜K.551＞の3曲であるが，この3曲は2ケ月という信じがたい短期間に作曲された。我々はその成立の動機については何も知らない。Mozart が夏に交響曲を書くということは異例のことであり，おそらく Mozart は1789年の冬に数回のアカデミーを開催することができると希望していたのであろう。しかしアカデミーの開催はこの年にも次の二年間にもできなかった。こういう事情であるから Mozart は最後の3曲の交響曲を指揮したことも聴いたこともなかったかもしれない。このことはおそらく，音楽と人類の歴史におけるこれらの交響曲の位置を象徴する事実である。もはや注文もなく，直接の意図もない。あるのは永遠への訴えである。〟Larsen はまたここでも Haydn を引合にだす。〝この一連の作品は Haydn が1785年から1786年にかけて作曲した6曲のパリ交響曲の成功に刺戟されたと思われる。〟ここで両者は，はっきりとその説がわかれてしまう。Einstein のあくまで Mozart が自己自身の問題意識から出発して作品を書いたという説に対して Larsen は，それは単に Haydn の交響曲の成功に刺戟されたものにすぎないとするのである。Larsen は Haydn を重視することにより Mozart の発展を説明しようと試みるのであるが，ややその比重が Haydn にかかり過ぎるということを感じないわけではない。しかしこういう点から Mozart の交響曲をみると，従来の照明によっては照らされなかった新しい面が見出されるということは，Larsen の達見というべきであろう。